

創刊にあたって

東北雑草研究会会長 三枝正彦*

雑草による農作物の被害は病害や虫害あるいは鳥獣害に優るとも劣らないにも拘わらず、雑草は戦前まで農学の研究対象にならなかった。それは“農民は汗を流し、苦痛を克服し、時間を問題とせず、耕地を清掃すべきで肉体の酷使が農民の最高の道徳”とするわが国の伝統的勤労農本主義に基づき“雑草は手でとれば足る”とする考え方が先行したからである。事実、農書では“下農は草を見ても草をとらず、中農は草を見て草をとり、上農は草を見ずして草をとる”とも言われ、雑草の防除は農業の基本であることが窺われる。

このようなわが国においても1948年に行われた2,4D剤による大規模水田除草試験の成功は雑草学とりわけ化学的雑草防除の発端となり、化学薬剤による雑草防除が一世を風靡するに至った。しかしながら利便性と経済性を重視するあまり過度の薬剤散布が行われたり、米国のベトナム戦争における枯れ葉剤2,4,5Tの使用による催奇性の発現、“沈黙の春”や“複合汚染”など知識人による告発書の出版、消費者の安全食品への強い関心などによって、化学薬剤を主体とする雑草防除は大きな転換期を迎えている。また遺伝子組み換え植物作出技術の発展は新たな雑草防除体系の確立と雑草の遺伝子資源としての重要性を認識させ、単なる雑草たるにとどまらず野生植物として総合的に扱うことの重要性を浮き彫りにしている。しかしながら“農業は雑草との闘いである”とする作物生産体系における雑草防除の重要性はいささかとも変わりなく、むしろ環境との調和が余儀なくされる現在こそ雑草の基本的生理生態や総合防除を基本とする雑草学の重要性が存在するものと思われる。

東北地域における雑草関係の集まりは1995年以来東北地域雑草制御研究会或いは水稲栽培研究会として水田雑草の防除や除草剤抵抗性雑草について5回に渡り、東北農業研究推進会議水稲部会が中心となって開催されてきた。しかしながらこの研究会は国立の雑草防除研究者が参加しやすい形態である反面、参集範囲に制限があり、大学、民間関係者が参加し難いこと、課題が水田雑草に限られることなどの問題点があった。これに加えて、近年この研究会を国立機関が中心となって継続的に開催することが難しくなってきた。

しかし農業における雑草防除の重要性、学問としての雑草学の重要性が再確認され、大学、民間関係者が自由に参加できる研究会、稲作以外の畑作、野菜作、果樹作、林業生産にも及ぶ雑草或いは野生植物に興味をもつ研究者の集いとして、東北雑草研究会1999(仙台)、2000(盛岡)が開催され100人前後が参加した。またこの組織を継続的な研究会とした方が良いという多数の意見があり、日本雑草学会に因ったところこの度その東北支部としての発足が認められた。“東北の雑草”は雑草学会東北支部の研究、普及活動を紹介する機関誌であり、地域に根ざした貴重な事例研究や地域特有の現象や生理、生態の観察、解析、実用的普及記事など本会和文誌とは趣きを異にする内容の掲載が期待される。21世紀の幕開けを記念すべく2001年に雑草学会東北支部とその機関誌“東北の雑草”が創刊されることはとかく土地利用型研究が軽視される風潮に対してその重要性を改めて世に問うものであり、文字どおり“雑草”のごとき逞しさと強かさで息の長い機関誌であることを期待する。